

令和3年度 【第12期】第1回長野県生涯学習審議会 議事録

日 時： 令和3年9月7日（火）13時30分～15時30分

場 所： オンライン開催

出席委員： 西 一夫（会長）、秋葉 芳江、泉山 莉奈、伊藤 美知子、小池 玲子、
関 正浩、長峰 夏樹、樋口 正幸、深野 香代子、堀内 絹予、松田 晶弘、
毛受 芳高、柳澤 礼子 （13名）

1 開会

○事務局（春原企画幹兼課長補佐）

2 原山教育長挨拶

皆さん、こんにちは。長野県教育長の原山でございます。

委員の皆様には大変御多忙の中、本日の会に御参加いただきまして感謝申し上げます。また、日頃、長野県教育に対し、御理解、御支援をいただいていることについても重ねて御礼を申し上げます。

今期第1回目の会でございますが、コロナ感染予防対策ということでウェブ会議とさせていただきます。御協力をお願い申し上げます。

平成30年度からスタートした本県の第3次教育振興基本計画は、来年度、最終年度を迎えるということで、現在、全力で取り組んでおり、令和5年度を初年度とする次期の教育振興基本計画の策定にも取りかかろうとしているところです。

今年度から来年度にかけて開催していただきますこの生涯学習審議会では、そうした次期教育振興基本計画の策定も意識しつつ、近年の社会の変化の中で、本県の生涯学習、あるいは社会教育の在り方の基本的な方向性や具体的な取組について、御審議、御提言をお願いしたいと思っています。

御就任していただきました委員の皆様は、それぞれ第一線で御活躍されておられます。そうした優れた活動、あるいは課題意識を共有しながら、自由に創造的な議論を期待しています。本会が、これからの長野県にとって有意義な意見交換の場となり、そして、学びの力で未来を切り拓いていくことにつながることをお願い申し上げ、冒頭の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

〈諸連絡〉

○事務局（春原企画幹兼課長補佐）

【本審議会運営についての説明】

【審議会資料の公開、審議会の録音の許可】

3 委員自己紹介

- 各委員より自己紹介

4 会長選出

〈委員の互選により西委員を選出〉

〈会長あいさつ〉

- 西会長

皆様、こんにちは。信州大学教育学部の西と申します。

生涯学習審議会の会長として、県のこれからの生涯学習、様々な地域や組織との連携について、皆様と知恵を絞っていくことになるかと思えます。ぜひ、忌憚のない御意見をそれぞれのお立場からいただけるとありがたいと思っております。有意義な形で審議会を進めたいと思っておりますので、御協力のほど、よろしく願いいたします。

〈職務代理氏名〉

- 会長の指名で、会長職務代理として秋葉委員を選出。

5 会議事項

(1) 審議の進め方

- 事務局（山本課長補佐兼生涯学習係長）

【第12期長野県生涯学習審議会のスケジュールについての説明】

【審議の進め方についての説明】

- 西会長

本日の議事につきましてはオンラインでの開催になりますので、チャット機能なども活用して、御意見、御質問をお寄せいただき、参考にしてまいりたいと思えます。また、会議終了後、事務局でそれらを整理し情報を適宜共有してまいります。

非常に意思疎通の取りにくい会議かとは思いますが、忌憚のない御意見、御発言をお願いいたします。

(2) 意見交換（生涯学習に係る現状と課題）

- 西会長

それぞれの委員の皆様から、あらかじめ御提出いただきました資料を基に、生涯学習に関わる活動の御紹介をお願いします。

限られた時間ですので、お一人5分以内でお願いします。語りたいことがたくさんあるのは重々承知の上で御無理を申し上げますが、自己紹介とそれぞれのお立場での活動、そこで抱えている問題などについても触れていただければと思います。何か意見を集約するというよりは、まずは長野県に関わって活動しておられる様々な方々から意見を聞いて、それぞれを共有しながら耕していく場だと位置づけられればよろしいかと思えます。

これから皆さんに御発言いただきますが、各委員で画面共有も可能になっておりますので、活動の写真なども御活用いただいてもよいかと思えます

〈各委員より生涯学習に係る現状と課題について〉

○小池委員

私が生涯学習という言葉を考えてときや、いろいろな機会に思いを巡らした際、「生きがいのある豊かな人生を築くために生涯にわたって一人一人がライフステージに沿って主体的に学び続ける学習」というイメージがありますが、おそらく、大方の方がそのように考えていらっしゃると思います。

生涯学習という言葉が30年程前に始まったときにも、「生涯学習とは、自己の充実や生活向上のために、各人が自発的な意思に基づき、必要に応じて自己に適した手段や手法を自ら選んで、生涯を通して学ぶこと」だったと思います。

自身の趣味や生きがいをもって、学ぶ機会や手法、情報を入手して学び続ける方もいらっしゃるが、その学びを地域や学校へ還元されている方もいらっしゃると思います。一方で、いわゆる生涯学習とは関わりのない方々の存在もあると認めざるを得ないと思うのです。

では、その方々は、どうやって学び続けるのだろうか、どうやったら今必要な学びを得られるのだろうか、その方々にどうやったら学びを提供できるのだろうかということを、ずっと私たちは考えてきたように思います。

学びの県づくりはとても大事な言葉だと思いますが、放っておいても学び続ける方と、学びが必要であってもどうしても学びを取得できない、あるいはしようとしなない方の二分化が進んでいるような気がします。

いただいた資料の「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」にもありますように、今、生涯学習は新たな展開を迎えていると考えます。この資料の中では、地域共生社会の実現のための学びが重要であると読み取れます。

新型コロナの感染拡大や、様々な理由で生活困窮者が急増しました。それ以前からも、地域には生きづらさを感じたり、地域に溶け込めなかったり、障がいを抱えていたりなど、生活の困難課題を抱えた多様な方々の存在があります。しかし、それは多くの地域では、いわゆる見て見ぬふりであったり、厄介な世帯となっていると感じます。

私が暮らす地域でも、先月に続き一昨日も大雨による災害が発生しました。実は、私自身も昨日からこの情報収集に努めており、資料にもありますように防災ネットワークを立ち上げましたので、朝から本当にばたばた動いているところでした。

ただ、今回良かったことは、災害が起きたらどう行動するかという学びを、この地域の方々が皆さん共有して実践していたため、人的な被害がなかったことです。皆さんが命を救ったということは、私にとってはとても心強く感じました。

先ほどの資料にも、「学びを通じて人々の生命や生活を守る『命を守る』生涯学習・社会教育という視点が今後ますます重要」とあります。私は、今こそ地域課題を地域住民全体の共通課題として、その課題解決に向けた学びの場や講座等の提供がとても必要であり、その学びに基づいた制度の制定や、施策の構築が必要であると考えます。

行政が担う生涯学習においては、SDGsの観点からも、次世代を担う子どもたちばかりでなく、30年後、50年後の子どもたちにも今の学びが反映されて、豊かで心地良い生き方ができる世界を保障する、または保障できる手立てを、今から私たち大人としての責任において構築しなければいけないと考えます。

今の時代が求める学びは、県の今の教育振興基本計画、「学びの力で未来を拓き、夢を実現する人づくり」のさらなる発展を求めていきたいと思います。

○長峰委員

社会福祉協議会の長峰です。社会福祉協議会について一言だけ補足をしますが、福祉事業を行う社会福祉法人で、各市町村に一つずつ設置されているという公共性の高い民間団体という役割があります。各市町村でボランティアセンターを運営しているところも多いため、そのような場でお世話になっている方や、関わっている方もいらっしゃると思います。

市町村社協の事業内容には個性があり、社会教育分野、まちづくりとの連携に頑張っているところもありますし、福祉以外のところではなかなか関わってくれないと言われるときもありますが、温度差はありますが、地域の実情に沿いながら連携を深めさせていただければと思っています。

共生社会というお話がありましたので、私は話すよりも写真を1枚用意しました。パラリンピックの開会式に、私たち仲間で車いすのギタリスト、川崎さんが出演しましたので写真でご紹介します。障がい者理解を深めるということを超えて、今の若者たちにも、自分のやりたいことをやろう、好きにやっつけていいよという強いメッセージを彼も伝えたいと思いますので、県社協の職員として福祉教育を担当していますのでぜひお声がけをいただければと思います。

私の資料「生涯学習に関わってどのような活動を」の①ですが、福祉のPRということで「福祉で学ぶ訪問講座」を開催しています。これは、県からの委託事業として、学校、公民館の事業等、様々な場所に川崎さんも含め講師として訪問するという形で使っていただくことができます。ぜひ、

御利用いただければと思います。

②は、福祉分野の中でまちづくりや地域づくりと考えたときに、私たち福祉分野の人間は、福祉専門で狭過ぎるのではないかという反省から、「共生みらいアイデアコンテスト」を3年前から実施しています。これは、工業系やデザインで活躍している福祉分野以外の学生等から、地域づくり、福祉の課題解決のアイデアをもらおうというコンテストで、大変盛り上がっています。

「ユニバーサルカラーすごろく」というデザイン系の学生の作品は、現在、小中学校の副読本『あけぼの』に採用されています。また、信大教育学部の学生の作品で、介護現場での「とろみ測定スプーン」は意匠登録を取得しました。コロナ禍で商品化には至っておりませんが、面白いコラボも進んでいます。これらは、まさに学びと課題解決ということで、もっとたくさんの参加をしてもらいたいと思っています。

防災の面では、長野工業高校の学生たちが、防災マップを作るときにどういう要素が必要かと考えた中で、Wi-Fi がないところへは事前避難しないのではないかという意見があり、印象的でした。このような若者の意見をぜひ活かしていきたいと取り組んでいます。

③の学びと福祉の分野では、様々な地域で活動されている方をつなぐコーディネーター役を育てることが私たちの仕事の一番大きな部分です。長野県地域福祉コーディネーター総合研修という名前で、年間20日間程のスケジュールを組んでいます。ホームページで随時ご参加を募集しておりますので御覧いただければと思います。

具体的な活動が④です。今、小池委員からも少し生活困窮者の問題がありましたが、フードバンク事業については、県内各地でコロナ禍の影響もあり、非常に活動が活発化していますが、広域調整の機能の不足が課題でした。そこで、このほど、県庁のそばに大きな倉庫を確保できましたので、広域での過不足調整を行う拠点として、ウェブデータベースも作って、県内各地のフードバンク活動団体の連携を促進していくことが課題です。

若者の自立支援の部分については、行政と社協で連携をして生活困窮者の相談事業「まいさぼ」を運営しています。コロナ禍で苦しんでいる、困っている方々に気軽に相談してほしいという思いがありますが、今の若者たちには、自己責任論とも言われるものが刷り込まれて社会に出てきているように危機感を持っています。教育分野と福祉分野でしっかりつながり、ヘルプを必要とする人が気軽に福祉につながるができるよう、連携の強化をお願いします。

○柳澤委員

最初に自己紹介から始めさせていただきます。私は佐久市の中央公民館の館長をしておりますけれども、この職に就いたのは昨年からです、38年間、学校教育の分野で仕事をしてまいりました。そちらではコミュニティスクールの構築などに関わってまいりましたが、公民館長としては新米の部類ですし、コロナ禍の中で館長になったため、それ以前の状態のことを知っているわけではないと

いう弱みもあります。逆に、市民感覚を強みにし、市民視線を大切にして、市民のためになる公民館をつくっていきたいと考えております。

佐久市の公民館は、中央公民館と7つの地区公民館があり、それぞれで連携し合って進めております。また、自治公民館として地域住民が運営する地域公民館が佐久市内には235館あります。そういった公民館と連携を図りながら、市民のニーズを掘り起こしてやっていきたいと考えております。

逆に広い組織では、東信の組織として公民館同士が連携した東信地区公民館運営協議会、県の公民館運営協議会、また、全国にも組織があります。

それぞれが、コロナ禍でどのように成人式を行うか、どのように講座を行っていくか、リモートをどのように取り入れていくかというような情報交換を常にし合っています。現在はこのような中で研修をしながら学んでいるところです。

私の資料をご覧ください。私は、佐久市の公民館報の編集をしていますが、同じ形式になりがちなところ、市の…いわゆる官からの公報に終始しないように、できるだけ市民の方の生活実感、息遣いが感じられるものを作りたいと考えて進めております。

先ほど長峰委員からもありましたが、公民館活動は男性や若年層の参加がなかなか難しい分野です。高齢者の方の居場所にもなっておりますし、また、保育園入園以前の乳幼児に対する学級もあつたりするのですが、なかなか男性や若者が参加しにくいという点がありますので、そちらを克服したいと工夫しております。

課題としましては、公民館はカルチャースクールのように楽しい講座がたくさんあるのですが、そこで楽しんでおしまいというのではなく、学んだことを地域に戻って広げ、地域の自治力を高めるといことが、公民館活動の一番大切な柱と考えております。そういった地域活動に結びつくような講座をこれから作っていかなくてはならないと思っております。

一見、公民館活動も活発に行われているようですが、小池委員がおっしゃったように、やはり参加できている方は積極的な一部ということが、私も最近分かってまいりました。公民館活動は最も身近に参加しやすい活動だと思いますので、裾野を広めるということについてもこれから努力してまいりたいと思っております。

○樋口委員

自分は、10年前に長野県北部地震で壊滅的な被害を被った集落に暮らしています。あのときは、もうここでの暮らしは駄目かと思い、顔を上げることができない日々を1年間過ごしていましたが、ある出会いから本当に明かりが見えて、集落全体で夢を持ちました。300年後に集落をつなげるとい夢を掲げたのです。

300年というと、今生きている人たちは到底見ることはできないことですが、これは、この震災

を契機に集落の歴史を学んだことに夢のつながりがあります。というのは、今から 300 年前に、この集落は一時、存続の危機に遭ったにも関わらず、一つの出来事により 300 年後、今、我々が暮らしているということです。

その歴史を知って驚いたとともに、今度は 300 年先のここに住んでいる人たちにこの地を残してあげよう、大きな地震があつて駄目かと思つたけれども、こういうことをやったことによって、我々が今ここに暮らしているという感動を 300 年後の人たちにも感じていただきたいということで夢を掲げました。

この 10 年の歩みの中で、本当にいろいろな人との出会い、いろいろな学びがありました。知らないことを知るということは面白くないわけがない。面白いのです。歴史にしろ、地域環境にしろ、いろいろなことを知ることによって、この地域がどんどん面白くなり好きになっていく。まずは地域の足元を知るといことはとても大事なことだと思っています。

そのようなことをやりながら、地域のみんが面白く、ここで暮らせて良かったと思えるようにしていきたい。今、多分ここに住んでいる人たちはそう言ってくれるのではないかと思います。そして、子育てをしたくなるような地域づくりもしていきたいと思います。

そのためには、みんなが生き生きして、きらきら光って見えなければ、誰も行ってみたい、あんな集落もあるんだねという関心を持たないと思うのです。我々は、とにかく楽しくやっていたら、必ずや多くの人たちが関心を持ってくれたり共感してくれると思っています。

今、交流活動を中心に行っておりますけれども、1 万人、2 万人の人がこの小さな集落に訪れたら、その中の数人はここで暮らしてみたいという人が出てくるのではないかと考えています。我々が今やっていることというのは全て定住対策です。ここで住むために、住みたくするために、どういことをやっていこうかといことを常に考えて取り組んでいます

震災後に生まれた子どもが 7 人、もうじき 1 世帯増えて子どもが 10 人になる予定です。震災のときにたった 38 人になってしまいましたが、その後 39 人になり、子どもが 1 人生まれまして今は 40 人になりました。こういった明るいことはとてもいいです。

先日、おそらく長野県の最北端になるだろうと思われる一里塚跡が発見されました。今の時代に、それも私の集落で見つかる。それでまた盛り上がるということです。

私の住んでいるところは栄村というところで大雪が降ります。雪の降らないところの方たちは、よくそのようなところで暮らしていると思われるかもしれませんが、けれども、私はこの暮らしがとても快適です。雪は少しも嫌ではありません。

いろいろな地域があると思いますが、その地域で暮らすといことの価値観に、私は大変関心があります。価値観がとても大切で、こういうところだからこそ忙しくない、時間に流されない、人々に流されない、自分たちが自分たちの暮らしをつくっていくという今の生き方がとてもいいなと感じ、多くの人たちに暮らしというものをもう一度考え直してもらいたいと思います。

○堀内委員

私は学校現場で働く立場として発言いたします。

子どもたちは小学校から義務教育の中学生まで9年間あるわけです。小学校の低学年では少しまだ難しいかと思いますが、学びや学習をやらされているということではなくて、自分のために学んでいる、自分の成長のための学びであるということを自覚させていきたいと常々思っております。

学校の中でも意識させていきたいわけですが、そのような意味で、何年か前に配られたキャリアパスポートというものをもう少しうまく活用できないかと思っております。キャリアパスポートを、自分の成長や自分を分析しながら、自分をつくっていくパスポートとしてこれから運用できればいいのではないかと、そして、生涯教育・学習にもつながっていくのではないかと学校現場で感じております。

2点目です。具体的な活動ですが、本校、神科小では今、「おたすけっ十有志隊」という地域ボランティアの皆さんに学校に入らせていただいております。既に、当校だけではなくどの学校でも信州型コミュニティスクールが浸透し、地域の方々にクラブの講師になっていただいたり、勉強を可能な限り教えていただいたりという活動が進んでいるかと思っております。

ただ、今はコロナ禍でありますので、なかなか今までどおりに地域の皆さんに入らせていただくということができません。コロナ禍前は、昔の遊び、ミニスポーツなど、地域の皆さんも生きがいとして、楽しみとして、学校の子どもたちと一緒に活動をしてくださいました。

そのような日が早く戻ってくれば良いと思いますが、コロナも悪いことばかりではなく、ここで一歩立ち止まったことによって、少し無理をして地域から入ってきた皆さん、それから学校も、もう少しやっていただきたいことをいろいろ精査しながら、本当に持続可能な、地域との連携というものを考え直すいい機会になっているのかなと前向きに捉えております。

最後ですが、課題と感じているところです。私もそうですが、保護者の方も大変忙しく、ゆとりがありません。今の樋口委員のお言葉をとてもうらやましいなと思いながら聞いておりました。ゆとりがない時間ではありますが、保護者の方はもし時間があつたとしても、私もそうですが、ネットやSNS等に回ってしまつて、どうしても人としてのバランスに欠けてしまう今の社会状況があると感じております。

ぜひ、社会教育それから生涯学習の中で、五感や体験というものを大事にしながら進めていきたいと思っております。学校教育の中では、特に体験活動、情操教育を一層充実させていきたいと思っております。

先ほど、小池委員から二分化しているというお話があつたかと思っておりますが、二分化しない素地を小さいときからつけてあげて、人生を楽しむ、人生を豊かにする、この地域は楽しい、いろいろな面白いことがいっぱいあるというような素地を、学校教育の中からも培っていききたいと思っております。

ます。

○関委員

白馬高校校長の関と申します。

ただいま、堀内校長先生から小学校での取組についてお話がありましたので、私からは高校生と地域の結びつきということでお話しさせていただこうと思います。

本校白馬高校は、国際観光科という専門学科と普通科がそれぞれの学年に1クラスずつあって、全校でも6クラスという大変小さな高校です。

学校がある白馬村と、それからお隣の小谷村の皆さんの地域の学びを豊かにしよう、そして、地域を元気にしようという強い思いに支えられ、観光、それから環境、英語といった、授業ではもちろん、生徒の興味関心に応じて、放課後や休日に行う課外での活動においても、様々な学びの機会を地域の皆さんと協力して開設をしているところです。

今日はその一部を御紹介したいと思います。画面を共有させていただきたいと思いますので、こちらを御覧ください。

これは本校で発行しているボランティアニュースですが、春先の酒米の田植えのイベントや、村内に大変はびこっているオオキンケイギクという外来植物の駆除ボランティアの協力をしています。それから、これは山道整備です。五竜の観光協会などと協働させていただいております。さらには、これは残念ながら延期になってしまいましたが、車椅子スポーツの体験学習会などにも生徒が参加して、地域の皆さんと一緒に学ぶ機会をいただいております。

これは今お話しした山道整備の新聞記事になりますが、こうして登山道を整備するのに下から木材を持ち上げて道を整備するわけです。今、映っているのは本校の山岳部の生徒でございまして、一番先頭にいるのは今年入学した1年生で、随分たくましく育っています。こういった形で、地域の皆さんとともに地元の山を守ろうという思いで生徒たちは活動をさせていただいております。

これは、今、白馬村の観光局で、循環型経済、サーキュラーエコノミーといっていますが、これを実現しようということで、様々な事業者の方や個人の皆さんが集まって、村全体で経済を回していく取組をされています。ここに映っているのが本校の生徒ですけれども、こういったところに入れていただいて、一緒に地域を考える学びを深めております。

生徒が、同じ年代だけではなく、地域の様々な年代の大人と一緒に考える機会というのはとても大切だと思っています。しかも、それを教室という制約された場所を離れて、社会や自然の中で体験する。こうした経験値が高い生徒ほど学ぶ意欲というものがあったり、感性が豊かだったり、あるいは社会への視野を広く持っていると私自身感じています。そのような学びの場を広げていくように、学校も地域にあるセンターの一つとしてしっかりと機能していかなければいけないと考えているところです。

課題としては、このような学びで学校は担当の職員を置きますが、学校と地域を結んでくださる地域側のコーディネーターの存在が非常に重要になっているということです。そういった引き受け手を探すのは非常に困難で、ボランティアでやっていただくというのもなかなか苦しいところもあり、そういったものの予算も必要だということで、今、苦慮をしています。

最終的には、これまでのお話にも出てきましたけれども、地域に対する愛着を高校生のうちにしっかりと持ってもらい、やがては、またこの地域のために自分の力を尽くそうというような若い人たちが増えていくように、高校現場としても力を入れたいと考えて今やっているところです。

○西会長

私が提出した資料を見ていただくと、簡単なメモ書きという程度になっていて大変恐縮でございます。私自身、今、大学で教鞭を執っておりますけれども、長野に来て今年で丸15年、10月が来て16年目に入ります。それまでは茨城や東京で中学・高校の教員を長くしておりましたので、徐々に南へと下ってきております。ちなみに出身は北海道の道北でございますので、栄村に劣らぬ豪雪地帯、寒冷地でした。大体冬の寒いときはマイナス32～33度ぐらいまで下がるという地域です。

15年ほど長野県で生活をしていて感じることは、どうしても大学教員という立場になると、フィールドに出る機会は多くないというのが実際かと思っています。今、白馬高校の校長先生の関委員や、さらには堀内委員などからも、学校がどう地域と関わるのか。児童生徒の教育も含めて、地域との関わりというのがやはり重要だというような御発言があったかと思います。

私自身が、やはり生涯学習や生涯教育というときに考えていかななくてはいけないことは、最初の小池委員のところでも少し御発言がありましたが、関わる人と関わらない人という分断が生まれてきている。それは、恐らくおおよそ世代の分断に近いのかなという意識があります。世代をつなぐとか世代を通して連携していく、地域に関わっていくというつくり方、関わり方をどうつくっていくのかが、このような生涯教育や社会教育を考えていく上での一つの大きな視点になるのだらうなと思います。

そうしたときに、やはり地域というものをどう考えるかということになると思います。やはり、これだけ人の移動が広範囲になると、やがて学校の教育の中でも、もっと都会へ出ていくというような人が増えて、地域に対する愛着というような御発言も樋口委員からあったかと思いますが、私自身も、やはり地域の文化資産、それぞれの地域にある郷土と関わった歴史・事実であるとか、文学であるとか、そういったものをどう関わらせていけばいいのかということが、世代をつなぐことの一つのツールになるかと思っています。

郷土愛というような言葉でくくってしまうこともできるのですが、それぞれの地域に応じた文化であるとか、芸能であるとか、そういったようなものが伝承されてこそ、初めて地域というものが成立してくるだらうと思っています。

そうした中で何が大切なのかと思ったときに、私たちは今、大変便利な生活を送っているのだらうと思います。あまり困り感のない生活だと思うのですけれども、20～30年前は、そこそこ困り感のある生活をしていただたのではないかと思います。電話が普及していない。お隣さんや2軒隣に電話を借りに行くというようなこともかつてはあった。ところが、どの家にも電話があり、携帯を持つようになれば自立できてしまう。共助の精神はなくなってきているのではないかと思います。

ですから、困り感ということ、関わっていくというようなことを考える必要もあるのではないかと、ということが大きな方向かと思っています。困り感を持つ。例えば、高齢者の方、若い方、それからいろいろな立場で活躍している方たち、それぞれの困り感を共有していくということも一つの見方になるのではないかと、思っているところです。

○毛受委員

皆さん、本当に素晴らしいというか、生涯学習の議論をしていくときに、やはり地域の持続性や、災害や若者ということが、これまでの委員のお話の中にもたくさん盛り込まれていて、非常に問題意識が高い視点を提案されていらっしゃると感じました。

私も20年にわたって若者たちのキャリア教育という分野を、学校と地域をつなぐということでやってきた身であります。その中で、生涯学習というのは非常に重要な分野と私は認識しています。

ただ、一般的に生涯学習や公民館というと、御発言にもあったように、高齢者たちの居場所とか、それから少し余裕のある人たちの文化的学びが主になっていたり、そういうことが中心になっていくケースが多いと思います。しかし、やはり重要なのは、一生学び続けていく、一生自分をバージョンアップしていく、それが楽しくてやっていくし、それは生きるためにやっていくという切実感のある力強い生涯学習というのが、やはり私は非常に求められていると思ひ、そこを長く取り組んでいます。

画面共有させていただきますが、私たちがやっている活動でちょっと参考になるかと思ひているのですが、先日、コロナ禍の中でも愛知サマーセミナーというものを開催しました。名城大学の一つのキャンパスを借り切っています。

これはどのようなものかというところ、「誰でも先生、誰でも生徒、どこでも学校」というコンセプトで、もう32回を数えます。ノーベル賞の吉野さんなど、今、話題の方々を一生懸命、市民が自分たちで連絡をして呼んできます。別にマネジメントを持っているわけではありません。みんなそれぞれお手紙を書いたりしてこのような方を呼んできたり、有名人だけではなくて、一般の市民の講座のようなものもたくさん巻き込んでいきます。また、生徒が自分たちで学んできたことをここで発表するというような講座もたくさん出ています。これはリンクを貼っておきますので御覧いただければと思います。

通常ですと、3日間で2,000講座やるというすさまじい狂気のセミナーと言ひていますけれど

も、今年はコロナで4分の1です。会場も小さくして半分の人数でやるということをやってきました。

これが私たちがやっていることで、あとはインターンシップの推進など、やはり若者たちが学びは面白いとか、こういうことをやらないと地域が駄目になってしまうとか、そういうことが感じられる学びにできるだけ触れさせるようなことを一生懸命仕掛けています。

そのためにコーディネートをするという視点の人の人材育成というのは非常に重要なものになります。問題意識のところを残りの時間でお話ししますが、やはり、これからの時代で、特に地方に行けば行くほど、一般的な学校教育の一般的な価値感でやっていくと、若者がどんどん都会に流出していくという結果になってしまう。

私は、基本的には今、「おかえりモネ」の朝ドラにもありますけれども、地域と都会との関係性がかかなりテーマになっているのではないかと思っているのですが、やはり後ろ髪を引かれるような地域の魅力に自然に接していく。お前たち地域を愛せなどと言われるとむかつくし、そんな地域は出て行くみたいになってしまう。やはり背中では語る地域と出会っておかないと、出会った町を何とか守ろう、自分が力を持ってから守ろうという気持ちにもならないと思います。

中高生の中に地域とつながる学びをしっかりやった上で、その後に都会に出たり、いろいろな力をつけてから戻ってきて、何かの事業をやるとか、そういうこともできるような生涯学習、明日の社会につながる学び。私たちの「アスバシ」というのは、明日の社会にかける橋というソーシャルブリッジの訳でやっていますけれども、生涯学習がやはり今求められているのではないかと思います。

特に、二極化して貧困などの問題も出てくるので、疎外されている人たちをエンロールしていく、巻き込んでいくような生涯学習をやっていく必要があるし、最終学歴の時代ではなくて、最新学習歴を更新していく社会にしていくには、やはり生涯学習が一番主張していかなくてはいけない分野ではないかと思います。

○秋葉委員

改めまして、長野県立大学のソーシャル・イノベーション創出センターでチーフをしており、また教員もしております秋葉です。

ペーパーにも書かせていただきましたが、様式の枠が三つと限られておりまして、上の二つの枠は主に大学、あるいはCSIの立場として書いております。最後の下の枠の「課題と感じる」というところは、私個人の私見ということで書かせていただいております。

最初に、「どのようなことを」というと、大学としてはもちろん高等教育機関ですので、皆様に知の拠点として提供するということが非常に大きなミッションです。もちろん学部の学生を育てるということをやっておりますが、2018年に開学して今年で完成年度を迎えております。県立大でご

ざいますので、地域に開かれた大学として、かなり意識をしてソーシャル・イノベーション創出センター、略してCSIと申しますが、そこでもかなり頑張ってきたかなと思っています。

今、リカレントの話、最新学習歴というお話もございましたけれども、私自身のことを少しだけ御紹介すると、複数回の起業をしつつ、それこそ社会人の大学院というものが日本でできたはしりの頃に、大学院でまさにリカレントをしたという経験を持っております。そして今ここにいるわけです。

二つ目の枠の「どのような活動を」というのは、主に大学とCSIということで書かせていただいております。今まで再々出てきておりますように、学びたいと思ったときに学べるような環境を整えるということで、1番目は公開講座です。これは本当に誰でも開かれて無料でやらせていただいております。いろいろな方々をお招きするという形でやっております、去年からは完全にオンラインでやらせていただいております。

2番目のデリバリー・アカデミア制度というのは、公民館につながりのある皆さんがこの中にたくさんおいでなので、ぜひ積極的に御活用いただけたらと思います。リンクをそこに貼らせていただいております。これもオンラインに対応しております。

そのほか、3、4、5と書かせていただいております、6番のところですが、先日の8月27日に晴れて文部科学省から大学院の設置が認められました。昨日、ちょうど大学院生募集のパンフレットが出来上がってきております。まさに社会人の、大人のリカレントを加速させていこうということです。申請中と書いておりますが設置認可されましたので訂正をお願いいたします。

若者と地域をつなぐというところも私どものセンターで力を入れておまして、例えば学生が地域のプロジェクトに関わるようなつなぎをしたり、あるいは私も起業支援を大学の中で、アントレプレナーシップ教育をやっているのですが、実は学生自身が起業しているケースが複数出てきております。メディアなどでも目にさせていただいたこともあろうかと思いますが、古着屋、エシカルに非常に興味を持ってやっている学生たちや、コーヒーショップや、シェアハウスを運営しているような学生も出てきています。

今、感じている課題ですが、一番下に1、2、3と書いたところです。私が一番気になっているのは三つ目に書いた自己決定力と自己肯定感の薄い方々です。起業支援をやっていて本当に痛切に感じます。これはまさに生涯学び続ける人生100年時代に非常に重要なポイントだと思っております、そのようなところを加速させるようなことができればなと。そして、社会的な弱者の方々に、学ぶということは未来をつくることなので、そういうことができればなと。そこが課題に感じております。

○深野委員

私は KOA 株式会社という伊那谷を中心として電子部品の製造販売をしている会社で長いこと役

員として、特に社員教育に携わらせていただいております。

2011年長野県能力開発審議委員の任命を承りまして、第5次能力開発審議計画の答申をさせていただいた経験もございます。その際に、今回の生涯学習計画にもありますけれども、南信工科短大の設置の提案もさせていただき、その後実際に設立に向けて南信工科短大検討委員も務めさせていただきました。

皆様の御意見と同様に、問題点は同じように感じております。進学すると地元に戻る若者がいない等のお話もありましたけれども、長野県の中で、南信地区は学ぶ場所が少なく、このエリアで進学する高校生の85%が伊那谷に戻ってこないという現実もございました。信州大学の農学部や、南にある飯田市の短大等はございますが、電気、電子という、まさにこれからの長野県のものづくりの技術のイノベーションを学ぶ分野がなく、仕方なくこのエリアから出ていってしまうということがありました。そこで、この長野県工科短大の南信エリアへの開設に尽力いたしました。一方でリーマンショック以降、高校生の就職面接の実体験から感じたことは、学力がありながらも家庭の経済的な理由から進学すること、学ぶことができないという生徒が多くいるという現状を目の当たりにしました。そこで会社に入社していただいておりますお給料を払い、入学費、授業料などの学費は全額会社負担とし、卒業後の数年間はきちんと会社に勤めていただくというような仕組みもつくりました。リカレント教育の一環にもなるかとは思いますが、そういったことも進めてきております。

役員在任中は、人事教育を始めとする様々な仕組み、仕掛けをつくってまいりましたが、退任後は後進に託し、見守っております。

生涯教育では、社員教育においても壁を感じる場合があります。先ほど、興味がある、ない人、積極的な人、そうでない人が二分化されているというお話があったのですが、もともと一生学びだと思っている人と比較して、学ぶ意欲がなかったり、自分自身の現状を全く意識しない人、つまり学びは必要ないと思っている人が多いという問題もございました。

学校教育が終われば、会社に入って勉強する必要はないと勘違いをされている人も残念なことにいらっしゃいます。働くとは、人としてあるいは日本国民としての責任と義務はどういうことか。本当は家庭教育ですのような基本的なこと、例えば挨拶の大切さなど躰的なものを、企業として仕事を教える以前の段階から教育しなければならないことに大変苦勞をしたというのが正直なところでは。

昨今文科省でキャリア教育と言われた際に、企業は文科省の指針に基づいて何事においても全面的に受け入れ、協力するものだと言われている教員も中にはいらっしゃったり行政の方々も市町村別にそれぞれの教育委員会が連携せず、個別に一企業に対して生徒の受入れを依頼してくるケースもありました。当然そうした地域の皆さんの声に積極的に応えたいと思っておりますが、お客様とのお約束を守らなければならないという実業との板挟みで苦勞をしてきたこともあります。

意見というより実体験が中心となってまいりました。ここに問題として書かせていただいたとお

り、皆さんの素晴らしいご意見や活動が関連していない、連携が取れていないと感じます。また行政の担当者が人事異動により交代すると全てゼロクリアになってしまっていて継続できないという経験をし、なんとかつながることが出来ないかと思っています。

最後に、生涯学習は、言葉の意味を定義も明確にすること。そのうえで正しく理解することが必要と考えます。特に御家庭での教育、親御さんが生涯教育の重要性をお子さんに語りかけていかないと続かないものだなということ、経験を基に課題として感じております。

○泉山委員

松本大学3年の泉山莉奈と申します。大学ではBBS会という非行に走ってしまった少年のサポートを行うような活動に参加しています。また、ガールスカウトに小学校の頃から所属しています。このような活動に参加して、生涯学習等をめぐって課題と感じていることは、関心のない人にどう関わってもらうか、どう関わり続けてもらうかということと、暮らしている地区内のつながりの促進についてです。

皆さんの話にもあったように、様々な活動に関心のある人には生涯学習などの機会がたくさんありますが、関心のない人にはなかなか機会がありません。生涯学習は、人とのつながりを通して存在を認め合ったり、居場所にもなるものだと思います。存在を認めてもらうことが地区内の活動への参加意識の芽生えにつながるのではないかとこのようにも思っています。

どのように発信していくか、理解してもらうかということが課題であると考えています。

また、関心の薄い人とどのようにつながりを持ち続けるかということで、私の体験としてガールスカウトのお話をさせていただくと、ガールスカウトは人とのつながりと、自然とのつながり、自己開発という三つの学びを活動のポイントとして活動しています。野外での遊びが主だと思っていたとやめてしまう仲間もいて、そういうことに関してとても残念に感じています。

やはりガールスカウトにかかわらずだと思いますが、自分のために学ぶというような生涯学習そのものについての理解や意識が広がるといいなと考えています。

また、もう一つは、災害発生時などにも重要になってくる地区内でのつながりをしっかりつくるためにも、公民館活動への参加の促進が必要であると考えています。地区内の誰もが積極的に参加できるコミュニティーづくりをしていく必要があるのではないかと考えています。

○伊藤委員

この5月まで長野県PTA連合会の副会長を務めておりました伊藤です。副会長を務めながら、実は子育て委員会という委員会の委員長も務めておまして、長野県PTA連合会では長野県16郡市に分けたPTAの皆様と主に一緒に活動を行ってまいりました。

私も自己紹介になってしまったのですがけれども、今日のこの会も私には本当に場違いかもしれな

いのですが、私自身は保護者の代表といたしますか、子どもを持つお母さんの代表としての一般的な意見になるかと思いますがお願いします。

私自身子どもがおりまして、今、医療系の専門学校に行っている息子と、中学3年生の息子の2人です。県のPTAの副会長をやる前は長野市PTA連合会で副会長をやったり、その前は小学校のPTAの副会長をやって、PTA会長をやってという、4年ぐらいPTA活動をいろいろ務めさせていただきました。その中で学ぶこともたくさんありました。

まず、一つ目の「生涯学習についてどのような関心を」ということですが、ここにも書いてありますが、やはり大人になっても学ぶことは大切だなというのは常日頃感じております。ただ、子育て世代のお父さんお母さんというのは、子育てしながらお仕事もして、家のこともやってということで、なかなか自分の時間や余裕がありません。そういった点でも、やはり企業側としても、社員がプライベートも充実しなければ、いい仕事、いい成果も出ないのではないかとということで、本業の方で今、ライフワークバランス、業務改革、業務の効率化を目指すことをやっています。

個人的なのですけれども、そんな中で、実は今月会社で資格を取れと言われてまして、もうすぐ国家試験があるので、その勉強をやっています。実際、家で子どもたちの前で勉強している姿を見せているのですが、私が子どもたちに勉強しろ勉強しろと言うよりも、身近で、親である私が学んでいること、学んでいる姿を子どもたちに見せることによって、子どもたちも学びに対する意欲だとか、勉強しながら、学びながら得る夢だとかも学んで、得ていけるんじゃないかなと。子どもとともに一緒に成長できるのも大人にとっては必要なことかなと思っております。

二つ目の「生涯学習に関わって具体的などのような活動」ということですが、ここにも書いてありますが、長野県PTA連合会では様々な活動を行っていますが、その中で、家庭教育の重要性ということは常日頃からうたって活動しています。特に去年、私がいた1年前は、コロナ禍ということで学校休業がありました。その中でコロナ禍における家庭教育の重要性というのが非常にフューチャーされ、皆さんとともに考え学ぶ1年間になりました。

これは、先ほど言った16郡市のPTAの代表の皆様だけではなく、もっと多くの人に知ってほしい、知っていただきたいという御意見をいただきましたので、ホームページや、プレゼンテーションの内容をYouTubeで配信しており、現在400名ぐらい御視聴をいただいております。

この中で、先ほど深野委員から家庭教育についての御意見もいただきまして、家庭教育を難しく考えずに、文部科学省からのホームページを引用して、勉強だけでなく、家庭で子どもたちにできる、それぞれの家庭に合った家庭教育をしましょうということで、皆さんと一緒に考えるプレゼンテーションの内容になっております。

その中で、皆さんの御意見の中では、やはり子どもたちを育てるには、自分たちの家庭だけではなく、地域もそうですし、大人も学ぶ場をつくって、大人たちも知識を広げていかなければならないのではないかと。子どもたちのために何ができるのか一緒に模索したいというような御意見等もい

ただいております。

また、PTA の関連ですが、いろいろな学校の PTA 活動の中では、講演会やカルチャースクールなどで、保護者の皆さんに自己啓発を兼ねた活動も行っております。まず、子どもたちの自己肯定感を高めるためには、親の自己肯定感も高めなければならない部分では、こういった活動も必要かと思っております。

3 番ですが、生涯学習、社会教育をめぐる課題としてということなのですが、もしかしたらこれは私の個人的な意見かもしれませんが、特に AI といいですか ICT 教育が去年から始まっておりまして、子どもたちの方が順応性、適応能力はあるかもしれないのですが、正直親の私たち、保護者はついていけない部分が多々ありまして、この波に、大人たち、保護者が乗り遅れないようにするためにはどうしたらいいのかなど。これからの時代にやはり私たち大人もついていかなければいけないので、子どもたちとともに成長しなければいけないのかなどと思っております。

なかなか社会教育、生涯学習というと、どうしても保護者たちは難しく考えてしまうけれども、もっと気軽な気持ちで取り組んで入っていける活動になればと願っております。

最後に、「課題として」というところで仲間内とも少し話をしたのですが、やはり活動するには人材不足といいますか、マンパワーではないかということもあります。そういったところでも、もし何かお手伝いや協力ができることがあれば、PTA としても関わっていけたらと思っております。

○松田委員

私は今現在松川村に住んでおりまして、約 20 年前に関西から、こちらの水や空気、空の青さ、これは関西とは全然違うのですが、それと景色に魅せられて、こちらに移住してきました。

現在、私はボランティア活動を中心にやっております、私も場違いかなとは思っておりますけれども、何とか頑張ってやっていきたいと思っております。

私は今いろいろとボランティア活動に取り組んでおりますが、まず会社を退職して、いざ何をやるかと思悩んでいました。そのときに、県のシニア大学の専門コース第 1 期生の募集がありまして、そちらに応募しました。その中で、勉強をする際、今まで学校で習っていた座学ではなくワークショップ中心の学びということで、大変新鮮な気持ちで学ぶことができました。

そこで自分の課題を見つけて何をやるかというときに、居場所ということを決め、いろいろ勉強しました。知識不足、経験不足のため、当時同じ建物にあった県の社会福祉協議会の地域福祉コーディネーター研修というのがあり、そちらの勉強をさせていただきました。その中の選択科目で、県の生涯学習推進センターの講義がありました。面白い講義がたくさんあり興味を覚えました。ここで生涯学習という言葉を目にしました。

いろいろ勉強していく中で、まず、それをどのように生かしていけばいいかということを考えま

した。その中で、いろいろ資格などを自分自身が取ればいかなと、ファイナンシャルプランナーや地域福祉コーディネーター等々、そういうものを勉強することによって、松川村の高齢者地域支え合い体制整備協議会委員というのを募集していましたので、委員になりました。

今年までいろいろと会議を重ねて、ある程度骨子ができましたので、今年全面的に村社協のほうに移管され、今後は要請により参加することになりました。その他、ボランティア活動として「すずの音ホール」という公民館活動の応援団や、安曇野ちひろ公園（ちひろ美術館の隣にある公園）のサポーター、それに加え、今は松川中学校の環境整備ボランティアというようなボランティア活動。国営アルプスあずみの公園の自然観察指導員というサポーターは、昆虫や花、いろいろな勉強をすることになっておりますが、なかなか頭に入ってこなくて、今、一生懸命勉強しております。

その中で、人形劇を居場所の中でやろうということで、いい人形劇フェスタを開催しているいい人形劇センターに通い、人形造りから公演指導を受けて、人形劇の一座を立ち上げました。コロナ禍でなかなか公演できないので、新しい人形劇を作ろうと思い、新作づくりに通っています。

シニア大学の専門コースを出たことによって、シニア地域プロデューサーとして地域の高齢者を支える活動をしなさいということで、現在いろいろな高齢者を支える活動を行っています。今はコロナ禍の中で、対面活動が出来ないので、Zoomによる皆さんのお話会、それに加え、Zoomはなかなか私たち高齢者には使えないということで、その支援で、私も一緒に勉強しております。

皆さん興味のあるものには関わってこられるのですが、先ほど来言われているように、興味のないものにはなかなか関わってこられないので、まず自分が楽しんで、そして皆に楽しんでもらえるような環境づくりをしたいと思います。

学びの資源というのはいろいろなところにありますので、それを皆さんとうまく活用して、素晴らしい学習の場になるようなことができないかということを考えています。高齢者には、知識、経験、技能を持ったたくさんの方がおられます。私もいろいろな方を知っておりますが、そのような方たちと何かを結びつけ、そのような方たちの力を何とか活用できればなと思っております。

〈意見交換〉

○毛受委員

深野委員のお話の中にあつた貧困な家庭に生まれてなかなか大学などに行けなかったけれども、働きながら企業が費用をある程度サポートしながら、そこでキャリアをつくっていくという事例が語られたのが非常に面白く、私たちがやっている活動ともとてもつながっていると思いました。

それは生涯学習とは見られていませんが、高校から社会に出るというキャリアは、もっと磨けば地域に人も残せることができ、きちんと若者が成長していく教育が中小企業だとちょっと足りない。それを大学や地域の生涯学習機関が、しっかりと、どうやって自分のキャリアを働きながらつくっていったらいいかというようなことを、やはりやるような。

今日は非常に地域の活性化などの問題が語られてきたので、新たな論点だと思います。我々は高卒で社会に出る子たちを、「早活」というように言い直しています。高卒というと、どうしても大卒よりも低いと思われてしまいますが、早く社会に出て活躍するという意味で早活というように言い直そうと。それは、生涯学習の分野でいうと、そちらの方がすてきな感じになるため、早活キャリアという形で働きながら学び、学びながら地域に貢献し、そして別にもっと学びたいと思ったところから大学に行ってもいい。むしろそちらの方が世界的には標準です。このようなキャリアを生涯学習の分野でしっかりと発信していくというのは、私は非常に今の流れに沿うのではないかと思います。

本当に深野さんの事例をもう少し聞き、教えていただきたいなと思いました。

○西会長

深野委員と秋葉委員からもそういったキャリアに関わるような御発言があったかと思っておりますので、お二人からコメントをいただきたいと思っております。まず、深野委員、いかがでしょうか。

○深野委員

仕組みをつくり、実行してきて、少しでも御賛同いただける方々がいらして良かったなと思っています。

当然、そのこと以外にも、地域社会の中で小学校、中学校、高校と職場体験はもちろん受け入れておりますし、それとは別に、郷土愛というか、ふるさつを見直すための活動にも財団をつくってそちらから資金援助をさせていただいて、自分の生まれ育ったふるさつをもう一度よく学習し、ふるさつの良さを知ってもらうということもさせていただいております。

キャリア教育というところは、先ほど、先生方が企業にというお話がありましたが、実は長野県の小中の先生方というのは全県で異動なさっていて、数年経つと転勤されてしまいます。皆さんお忙しくて、本当に大変な御様子です。さらにキャリア教育といったときに、いろいろな企業だけではなく他の職業、農業や美容室、商店など、その地域を御存じなくて、生徒を送り込まれてしまう先生方がいらっしゃいました。当たり前のこととして受け入れ側にできることはやらせていただくにしても、もう少し先生御自身が、その地域や社会、どういう仕事があるということを学んでいた上で、生徒にお話しいただく必要があるのではないかと感じています。

そういったお互いに学ぶ産学官交流会の開催支援をして、既に数年にわたり何回か実施しています。今はその中心から外れてしまったのですけれども、続けていただき、いろいろな角度から、手を替え品を替え続けられないといけないと思います。私自身、社内教育に携わってきたときに思ってきたことは、教育は忍耐と継続だとこちらが諦めたら終わりですので、それを肝に銘じて、とにかく自分が諦めずに続けるしかないということでやってきました。

○西会長

秋葉委員、いかがでしょうか。大学教育、高等教育の立場からということになりそうです。

○秋葉委員

分かりました。

高等教育というところでいうと、高校卒業して大学に入ってというところにいるのですけれども、実際に、とりわけ私が携わっているのはアントレプレナーシップ教育で、その文脈から少しお話を申し上げると、アントレプレナーシップ教育は、起業すること、業を自分で立てるということが目的ではなく、そのようなマインドを持てる人材をつくり出すというところに大変力を入れています。

私自身も、起業を何回も経験している中で、最後に起業をしてもしなくてもいいのですが、起業というプロセスを経る中で、自分とは何者なのか、自分は何をしたくて、何をしようとしていて、どういう意志決定ができるのかということがとても問われますし、磨かれていくという大変大きなメリットがあると思っています。それは学歴には全く関係がありません。

先ほど、高卒の呼び方を変えてもっと違うブランディングをしようという話のように、本当にいろいろな光の当て方があっていいと私自身もとても思っておりますし、大変共感するところが大きいです。

一つだけ御披露すると、私の授業の中で起業家の方にお話ししていただいたときに、彼はキャリア支援に携わっている方なのですが、特色あるキャリア支援をやっていて、学生たちにこういう問いかけをしてくれました。「今まで歩いてきた人生、自分の人生にタイトルをつけてみよう。その先に、自分たちのキャリアというのがあるよ」というようなディスカッションをしてくださっています。

その授業に私はとても共感したのですが、そのようにキャリアというものを幅広く捉えられるのではないかと感じながら先ほど聞いておりました。

○西会長

高等学校の生徒を教育していらっしゃる関委員、さらに学びを続ける生徒もいれば、社会人として巣立っていく学生もいるかと思えます。様々な社会とのつながりをつくらうとしている学校の現場としては、どのように今のお話を受け取っておられるか、御発言をいただいてもよろしいですか。

○関委員

キャリア教育というものの自体は、やはり自分と社会がどうつながるのか、自分が社会の中でどうありたいのかということを考えることだと思います。そういう視点で高校教育でできることという

のは、やはり先ほども話しましたが、教室場面でできることというのは非常に限られていますので、そういう意味で、例えば地域の自然の中に出たり、あるいは企業にお世話になったり、私どもの高校ではデュアル実習ということで、70時間程度の実習を企業にお願いをして、日曜日などに生徒がお世話になっているというようなことをやらせていただいています。そういった形で、様々な社会へ目を開いていくということを高校ではやっていきたいし、やらなければいけないかなと。

そして大学に入った時点で、より先を見通して、自分の足元も見据えながら、自分の生き方を考えられるように、そういうつながりをつけるような高校教育でありたいと思っていますところ。

○西会長

実際に今学んでいる泉山委員にも一言、今の話の流れで意見をもらってもいいですか。

○泉山委員

私自身、高校から大学に進学する際、社会に自分がすぐ出るという実感が全くなく、普通に大学に行くんだなというような感じで大学に入学し、今ようやく就活の時期に入り、そのような社会とのつながりについて考え始めたところです。そういうことを高校のころから、しっかり学んだり知ることは大変いいなと思います。

○西会長

長峰委員、お願いします。

○長峰委員

関委員に一つ教えていただきたいのですが、資料の中で、課題として学校と地域を結ぶコーディネーターが不足と書いていらっしゃいます。私どもの福祉や地域づくり分野でも今、有給の職員、コーディネーターという仕事の配置が大変増えています。ただ、なかなか学校とのコミュニケーションを取る上で足りないものがあるのだろうと日々感じているのですが、どういうスキルを持ったコーディネーターをイメージされているかをぜひ教えていただきたいと思います。

○関委員

まず、地域のことをよく御存じであるということは最低限必要だと思います。それから、地域の中である程度ネットワークをお持ちであるということもやはり必要かと思います。

それと同時に、これはちょっと過大な要求になるかもしれませんが、学校の在り方というようなものについても少し御理解をいただいでいて、例えば生徒が外に出るときに、こういうときには行くことができないとか、こういう場面だったら生徒をどんどん送り出せるというような仕組みもご

理解いただいて、学校側の担当といろいろ調整をしていただけるような方であれば、非常に私どもと一緒に協力してできるかと思っていますところです。

○長峰委員

ぜひ今後の勉強の参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

○西会長

今日は御出席の13人の委員から御発言をいただいたわけですが、やはり地域とのつながりをどうしていきたいのか。あるいは地域に対する自己肯定感をどう育んでいくのか。そういったことが恐らく地域の中での強靱な人間関係をつくる。あるいは、小池委員から、茅野方面の数日前の災害の話がありましたが、そういった防災や減災、樋口委員の栄村もそのような形で災害を乗り越えるためには、やはりいろいろな形での協力関係を築いていくことが必要になってくるのだろうと思います。

そういったときに、恐らく今日、泉山委員のペーパーの中にSDGsという単語が出てきたと思いますが、例えばあの17の目標をベースにして、どんなことがそれぞれのお立場から見えてくるのか、可能なのか。県としても全体で、SDGsの目標達成に向けてということで動いておりますので、そのようなところも少し加味していただきながら、現在行っているそれぞれのお立場での活動をもう一度位置づけ直してみる。17の目標のどれが自分が今活動しているものとしてラベリングできるだろうかというような形で見ていただくと、それぞれのお立場の色が見えてくるのではないかと、今日お話を伺っていて感じたところです。

非常にそれぞれの皆様の問題意識、それからそれぞれにどう関わっていけば前向きに長野県の生涯教育、あるいは生涯学習といったものを考えていけるのか。中には、どうしても勉強というように思いがちなところですが、日々を生きていくために必要なスキルであるとか、そういったものを常に学び続けていくのだという発想でスキルアップしたり、自己更新したりという形で捉えていくことも必要なのかなと今日お話を伺っていて感じたところです。

今日の冒頭で申し上げたように、今日の第1回目の審議会は、話題を耕すというような形で、それぞれの関心を共有するということが大切なのかなと思いますので、ぜひこれを持ち帰って、さらに次の委員会に向けて深めていただければと思います。

(3) その他

○事務局（後藤主任指導主事）

【今後の予定についての説明】

6 閉会

○事務局（春原企画幹兼課長補佐）